

## 宇度墓出土の埴輪

### 一

大阪府の南端、岬町淡輪に所在する垂仁天皇皇子五十瓊敷入彦命の宇度墓は、全長一七〇メートルを測る大型の前方後円墳で周濠をめぐらせている。

当墓の整備工事を昭和五十九年の春に実施するにあたり、濠水を落下したところ、北側造り出しの部分に埴輪片多数の散乱している状況が観察された（第1図）。そこで、該所が再び水没して埴輪が散逸することのないよう、三月十五日に採集した。採集した遺物は、埴輪六七点、陶器一点であるが、埴輪の中には家形をはじめとする形象埴輪も数種にわたって含まれていることが窺えた。

当墓の埴輪は既に川西宏幸氏や筆者によって紹介されているが、形象埴輪は楯や衣蓋の小片が知られているにすぎない。また、既出の資料の出土地が外堤及び不詳であるのに対し、上述の資料は一括して北側造り

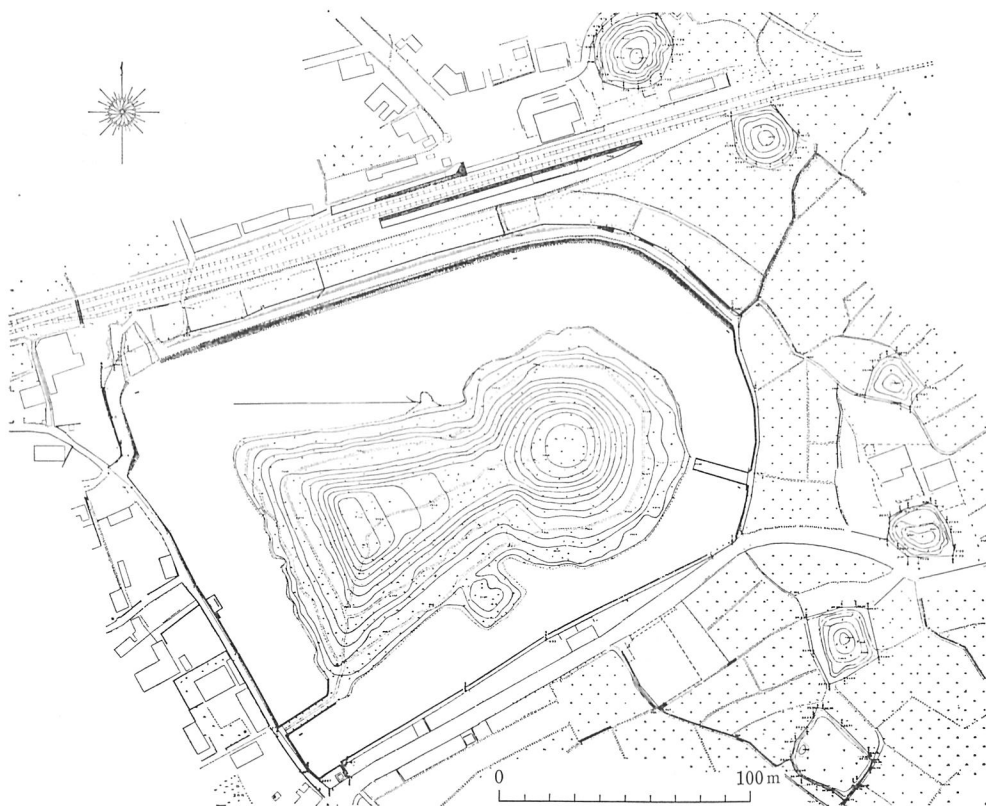
出しに配置されていた可能性が強く、その点においても資料価値は高い。ここに紹介する所以である。

なお、昭和五十年五月二十七日には埴輪一八点が上記と同じ場所で採集されており、ここに併せて掲載することにした。その際、埴輪の胎土、焼成、整形等に両者の差異はないので、以下の記述では特に区別しないこととする。

### 二

埴輪円筒（第2図1～第4図28、図版三）

当墓出土の埴輪のうち、埴輪円筒は、須恵器の技法を用いたものの多いことが知られている。今回紹介するものも、埴質の19と20以外は、すべて須恵器の技法や焼成の、両方か片方が用いられている。この須恵器の技法及び焼成とは、整形には叩きを用い、焼成は還元焰で色調が青灰色ないしは黒灰色を呈するものである。13は赤褐色を呈するが、須恵器

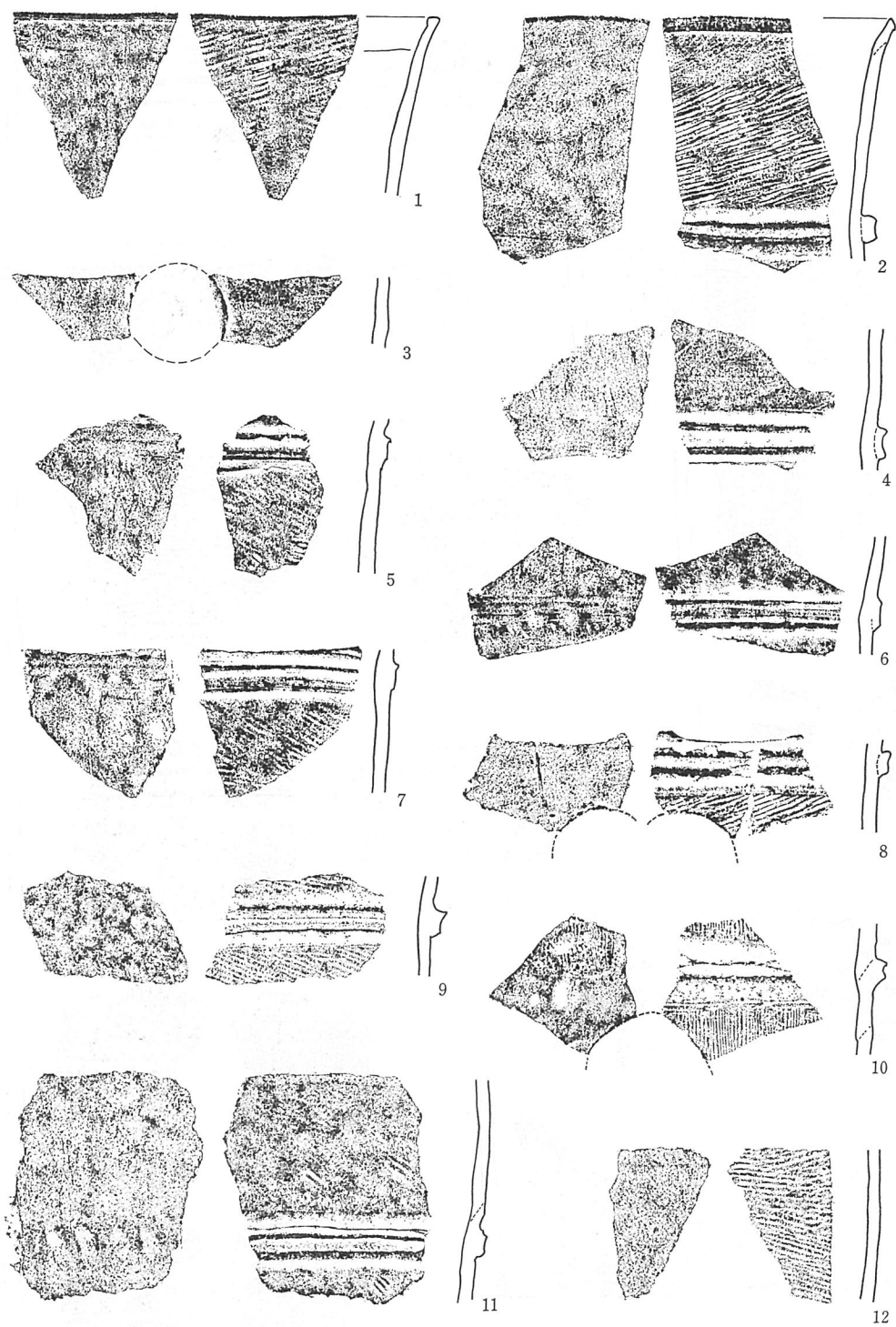


第1図 宇度墓埴輪採集地点（矢印）（ $1/3000$ ）

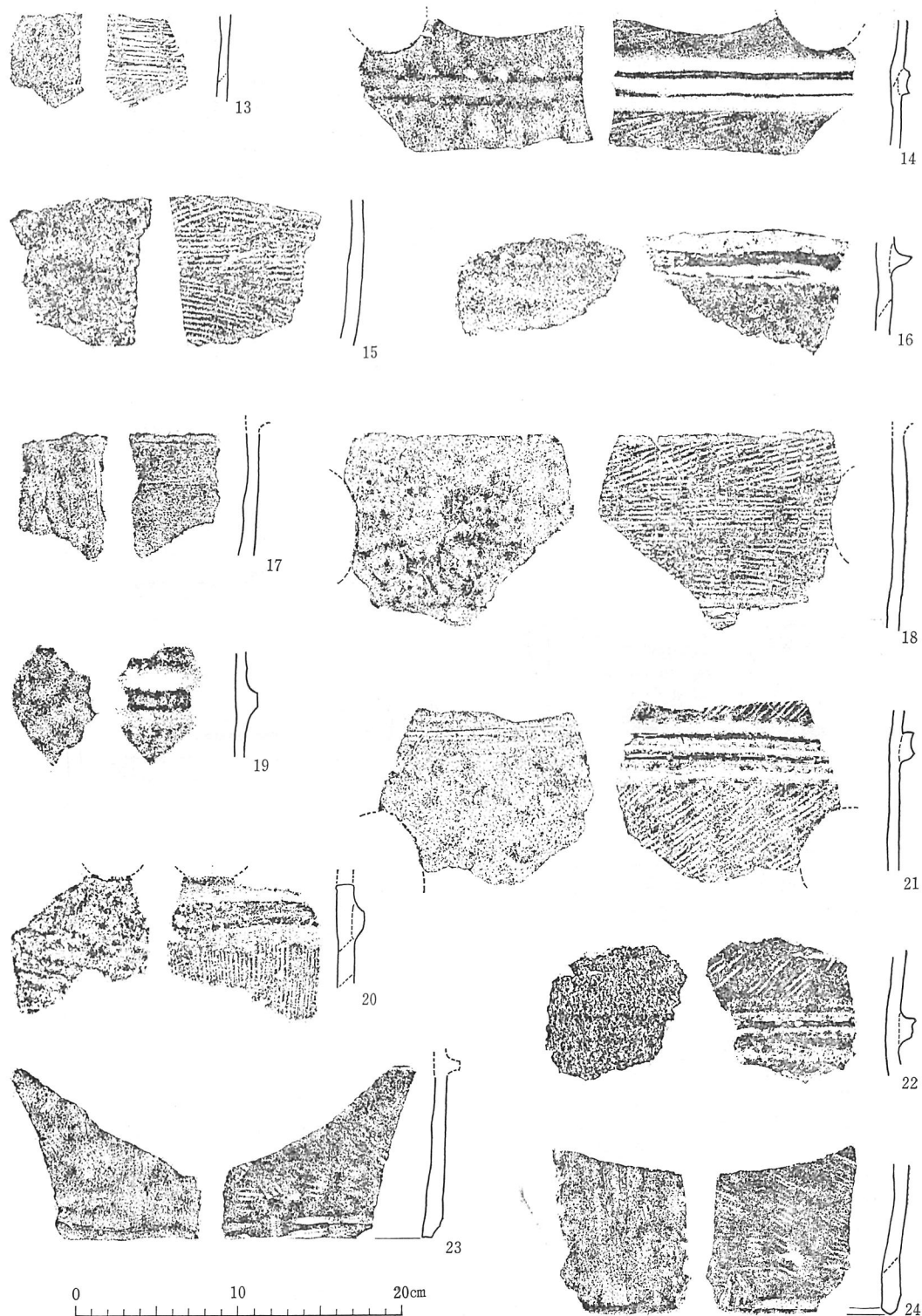
の技法である叩きがみられ、焼成も堅緻である。叩きについては、大部分が無でによって丁寧に消されている例（3・11・14・23・27）があるので、全く認められないものでもこの技法が用いられた可能性がある。ところで、須恵器の叩き技法の場合、内面にはあて具の痕跡である青海波文の伴うことが多いが、丁寧に撫で消されたためか、これまで報告例はなかった。しかし、幸にも今回顕著な痕跡を有する例（18）を示すことができた。あて具は直径約三センチで、青海波文の一部が重なるように密に施している。この外、12及び15にもわずかに痕跡が認められる。

外面の調整には叩き、撫での外、縦刷毛のもの（10）もある。このうち叩き及び縦刷毛は、突帯貼り付け前に施されたものである。内面の調整は撫でを多用するが、一部に縦刷毛（10）もみられる。この外、指頭による押えも認められるが、特に突帯の裏側が顕著である（6・7・11）。14は突帯の裏側上下をその中央に向かって押えた後、丁寧に撫でている。埴質のものでは、20の外面は突帯貼り付け前に縦刷毛を施し内面は撫で。19は摩耗のために不明。

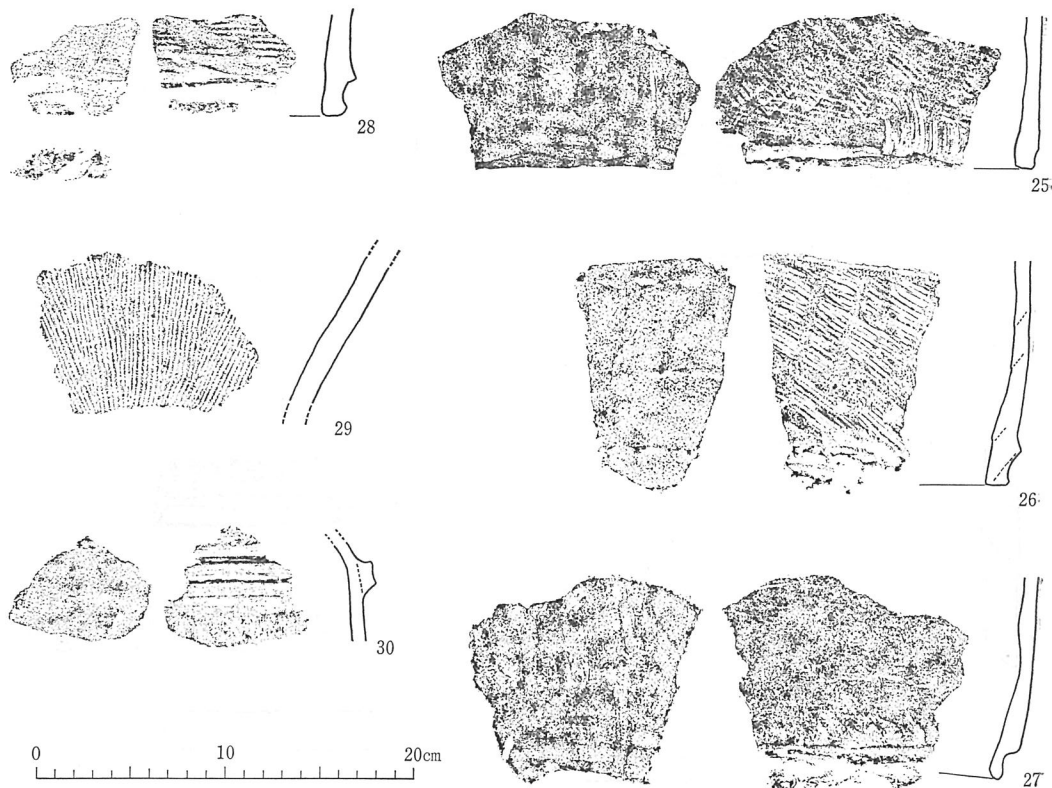
次に形態をみると、口縁部はゆるやかに外反しておわる。突帯は低い台形を呈するものが多いが、一部に断面が三角形に近いものもある（16）。底部は凹帯のあるもの（26～28）とない



第2図 宇度墓の出土品(1) (1/4)



第3図 宇度墓の出土品(2) (1/4)



第4図 宇度墓の出土品(3) (1/4)

もの(23~25)の二類ある。

なお直径を復元したところ、口縁部で約三〇センチ、底部では二五~三〇センチの間を示した。

胎土は焼成等の違いに関係なく同じものを用いており、砂粒と赤色粒を含む。

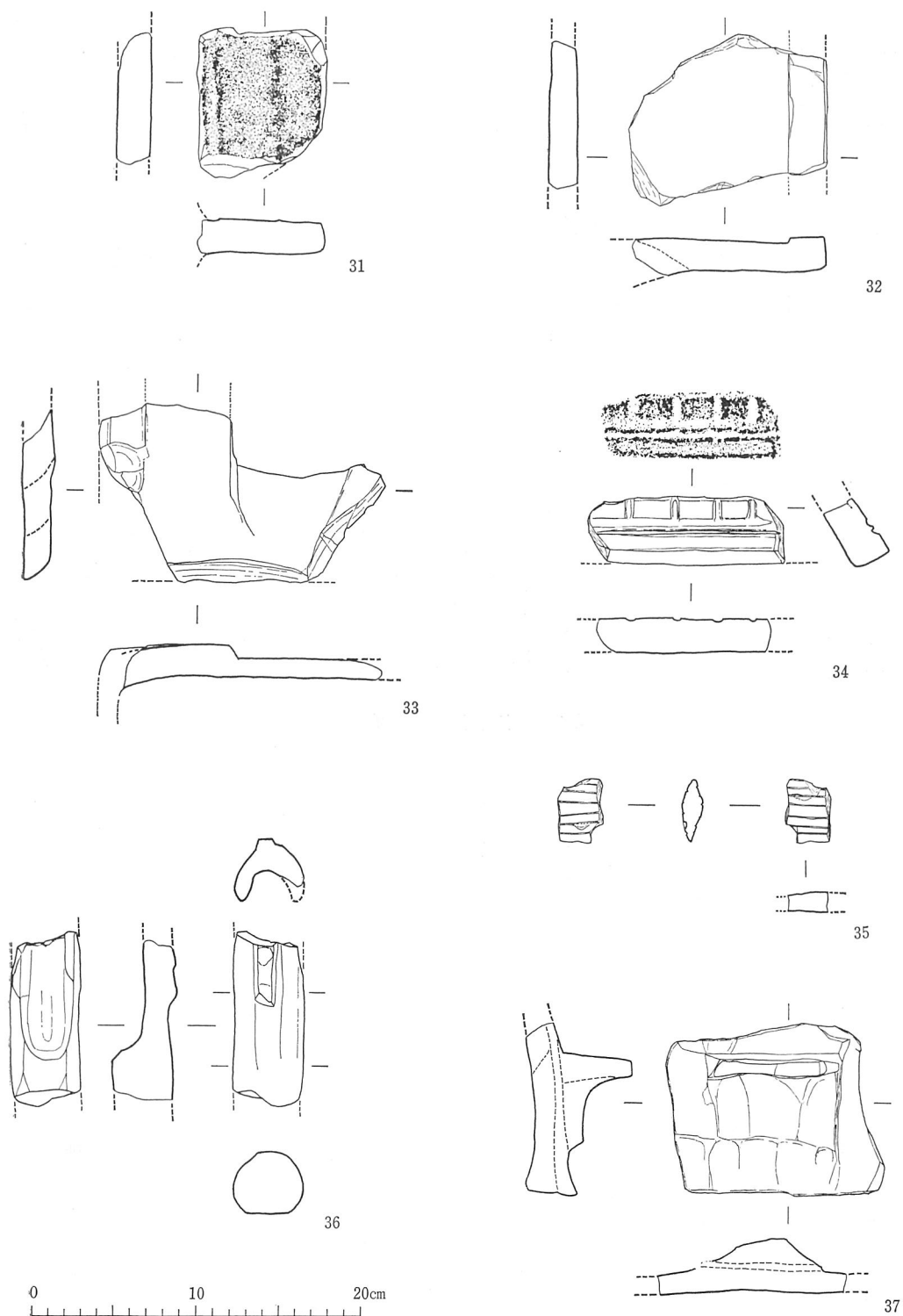
#### 朝顔形埴輪(第4図29・30、図版四)

29は頸部と口縁部の中間部で、大きく広がる。30は肩から頸部に移行する部分。29は器壁が厚く焼成はややあまいが黒褐色を呈し、逆に30は器壁は薄く焼成は硬いが赤褐色を呈す。

29は外面が縦刷毛、内面は撫で、30は外面が縦刷毛の後撫で、内面は撫でを用いる。前掲の埴輪円筒のような須恵器の技法は認められないが、いずれもいわゆる埴輪とは全く異なる。胎土は埴輪円筒に同じ。

#### 鱗付埴輪(第5図31、図版四)

図の右端と、その下端から左下へ斜めに延びる部分が本来の端部で、他は折損している。整形は撫でによるが、図示した面に比較して裏面の調整はややあらい。本例は赤褐色の色調を呈する埴質で、胎土は上掲のものと同じである。左側は本来の端部ではないが、他と接合した部分の剥離面にしては不自然な凹凸を有し、若干の問題が残る。衣蓋の立飾の一部である可能性もわずかに残すが、ここでは鱗付埴輪の鱗の下端部と判断し



第5図 宇度墓の出土品(4) (1/4)

た。

形象埴輪 (第5図32、第6図38、図版四)

家、楯、鳥などがある。焼成は、若干問題の残る鳥を除けばいずれも埴質で、この点埴輪円筒とは著しい相異を示す。一方、胎土は両者に差異がない。

家形埴輪 (第5図33・34)

33は基底部で、水平に突出した縁のない類である。図の左側は本来の端部で、壁が直角に延びている。壁には柱がつくり出されているが、下半部では壁の中に解消されており、この部分は地中に埋められているものと思われる。34は下部に篋描きの沈線が横方向に一条施され、その上には浅い凹線が横方向に一条とそこから直角に上方へ四条延びている。図の下端部以外はすべて折損しており、縦の凹線はさらに左右にも施されていたものと思われる。これらは、大阪府柏原市玉手山古墳群出土の家形埴輪の軒先にみられる押縁の表現と全く同じである。この外、これに近い表現の家形埴輪も多くあるので、本例も同様のものと解釈できる。

楯形埴輪 (第5図32)

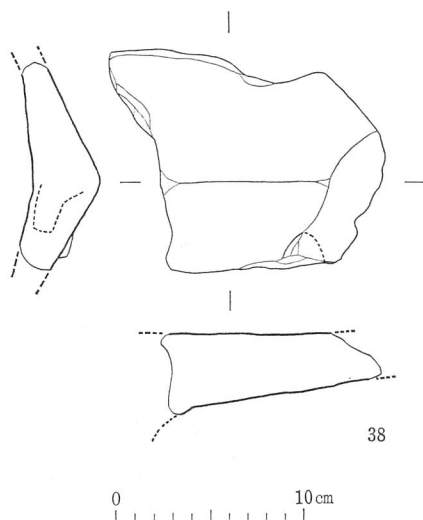
周縁に粘土帯を貼って肥厚させる類と思われる。図の左側の裏面も徐々に肥厚しているが、これは円筒部に接合するための仕業と思われる。なお、刻線等は認められない。

鳥形埴輪 (第5図35)

表裏に平行する刻線が認められる。縦位の断面をみると中央が最も厚い。中央部のふくらみを横位でみると、一方が厚く徐々に薄くなっている。本例は鳥形埴輪の尾羽根と考えて支障ない。なお色調は片面が青灰色、他が黄褐色で、埴質とも須恵質とも断じがたい。

不明形象埴輪 (第5図36、第6図38)

36は、平らな底面以外は丸みをもつ。しかし底面も一部を除いて抉られたような形状である。一方、上面には長方形の突起が付いている。家形埴輪の堅魚木の可能性を考えたが、上述の抉りの説明がつかず問題を残す。37は、水平に延びた突出部を柱状の貼り付けによって支える。突出は図の右側が折損しているが、支えはここできなくなっており、さほど延びていなかったか橋脚のように支えが一定の間隔をおいてつくられて



第6図 宇度墓の出土品(5) (1/4)

いたかのいずれかであろう。家形埴輪の基底部とすれば、突出及び支えの形態は異例である。38は、家形埴輪の屋根の可能性が考えられる。この場合、稜線部裏面の一方が厚くなっているが、同部が壁に近く柱に接続する部位であったとも考えられる。現存表面の端部には突起が一箇所認められるが、何を表現したものであろうか。屋根の勾配がゆるすぎるなど、部位を決定するにはなお若干の疑問を残す。

### 三

今回紹介した埴輪で最も注目されるのは、埴輪円筒の大部分が須恵器の技法を用いて製作されているのに対して形象埴輪の方はそのほとんどが埴質であり、あたかも種類によって製作技法や焼成法を選択しているかのような印象を受けることである。このことは既に川西宏幸氏によって、淡輪地域の古墳（当墓の外に西陵古墳と西小山古墳が挙げられている）の特徴として指摘されている。しかし西小山古墳からは須恵器の手法を用いた衣蓋が出土しているし、当墓をはじめ、西陵古墳の埴輪円筒にはわずかながら埴質のものも認められる。<sup>(1)</sup>従っておおよその傾向は認められるものの、厳密に区別されていたものではないと考えられる。両者の胎土に差異のないことも、このことに関係する事実と思われる。

次に須恵器の技法を用いた埴輪について述べたい。

既述のように、外面に叩き、内面は同心円状の彫り込みをもつて具

を用いて胎土を締め、窖窯焼成を行ったもので、十分に胎土中の空気を押し出したために器壁は薄く、叩くと金属音を発する。一般に須恵器の埴輪として報告されている諸例は、埴質のものよりは硬く青灰色を呈するといった程度のものが多いようであるが、当墓の例は小片をみると須恵器そのものと見誤まるほどで、他例と同列に置くことはできない。さて、既述のように紹介した埴輪はいずれも北側造り出しで採集されたものである。楯、家、鳥などの形象埴輪も相当数含んでおり、これらはいわゆる造り出し部の祭祀に用いられたものであろう。

### 註

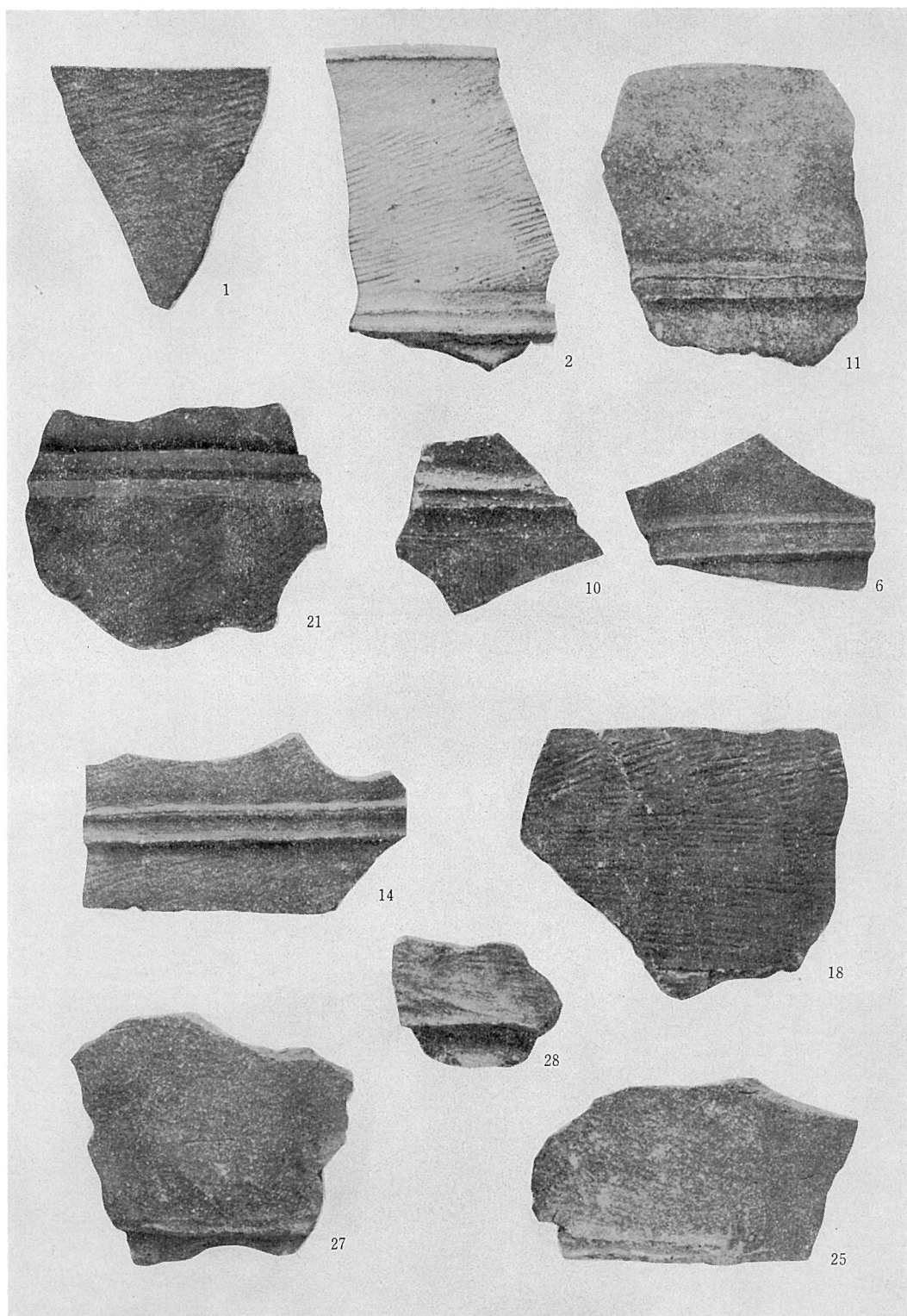
(1) 昭和五十六年に実施された西小山古墳発掘調査の概報では、埴輪円筒には土師質・須恵質の両者があり、前者の方が圧倒的多数を占めると記されている。しかし技法の説明がなく、土師質のほとんどが堅緻な焼成で須恵質との差も色調だけであると明言されている。従ってここにいる土師質は、本稿で述べた埴質とはやや異なった概念と思われる。

### 参考文献

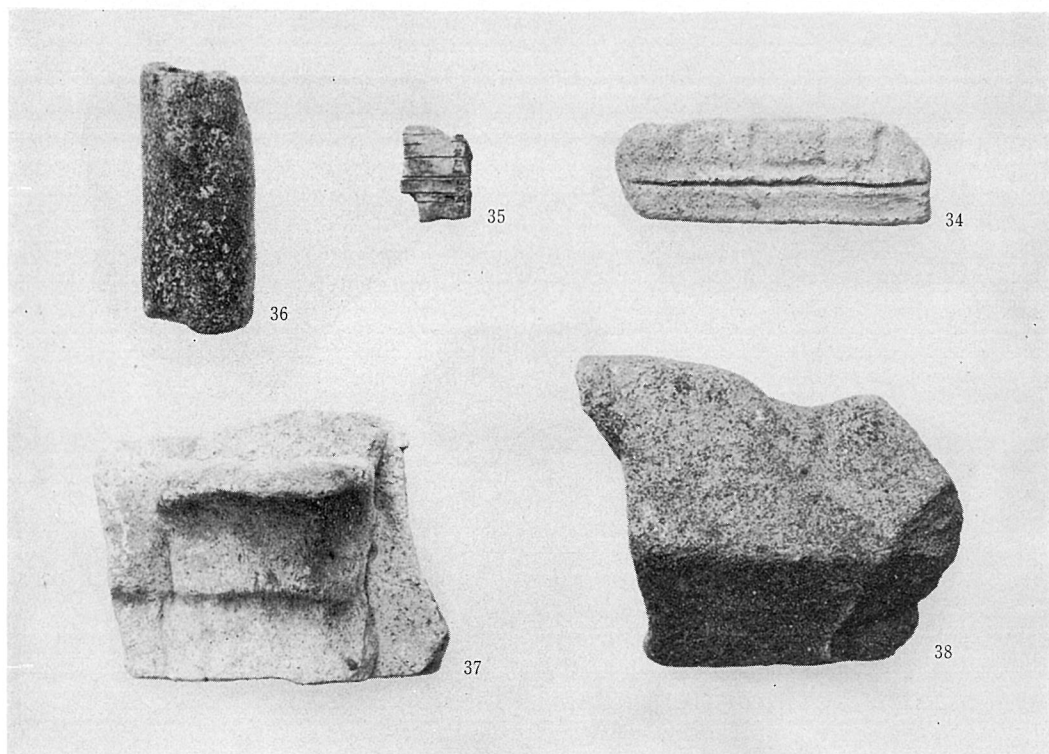
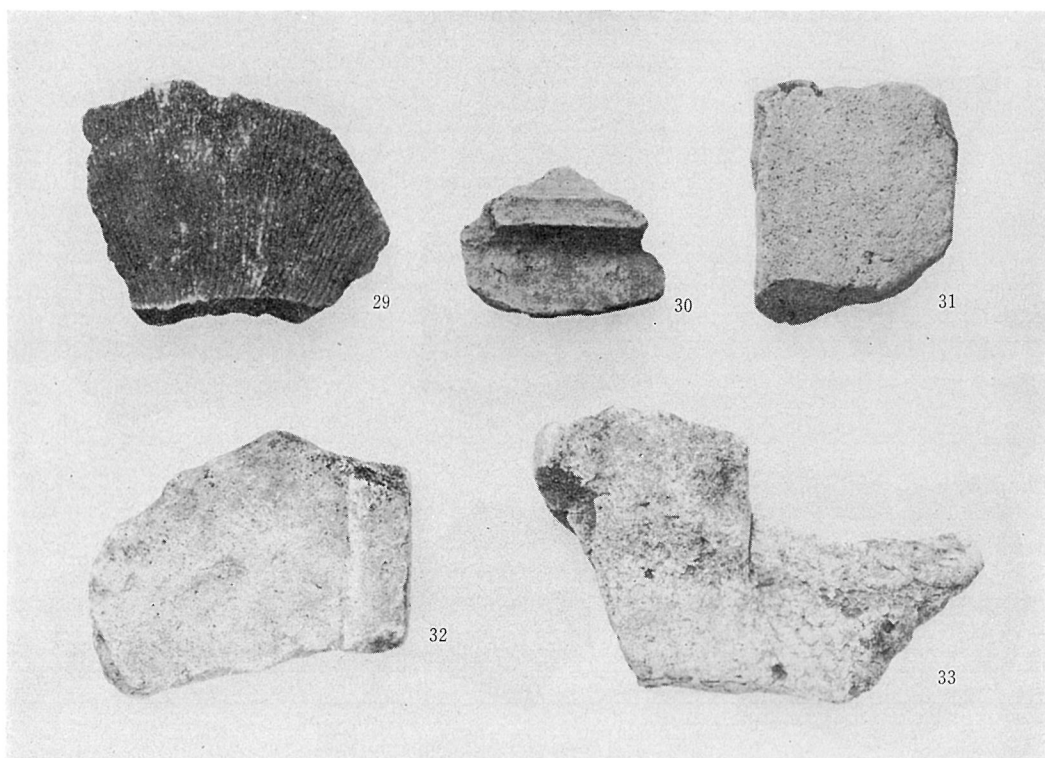
- 川西宏幸「淡輪の首長と埴輪生産」『大阪文化誌』第2巻第4号 大阪文化センター 昭和五十二年）  
藤永正明「西小山古墳」『淡輪遺跡発掘調査概要・Ⅲ』大阪府教育委員会 昭和五十六年）  
野上丈助『大阪府の埴輪』（大阪府立東北考古資料館 昭和五十七年）  
土生田純之「宇度墓整備工事区域の調査」『書陵部紀要』第36号 宮内庁書陵部 昭和六十年）

（土生田純之）





宇度墓の出土品(1)



宇度墓の出土品(2)